



2012/8/1 No.60

発行者：社会福祉法人 ミッドナイトミッションのぞみ会

本 部：〒293-0023 千葉県富津市川名1436番地

五十周年感謝会を終えて



常務理事

井本 義孝

当日の懸念されていた天候もまるで嘘のように晴れ上がりほっとして一ヶ月が過ぎようとしている。遠くは鳥取県から来葉された藤野日本キリスト教児童福祉連盟会長をはじめ静岡、神奈川、東京、茨城、埼玉の他県からも来賓をおむかえすることとなった。勿論地元佐久間市長さんやお世話になっている市町村関係者、そしてなんと言っても多くの福祉関係のみなさんのお励ましにはここから厚くお礼を申し上げたい。又、一年半前から構想委員、実行委員としてご協力いただいた地元、ご近所の方々や京葉後援会の皆様には職員と協働していただいた結果となりお礼の申し上げようもない。そして、特別養護老人ホーム「富士見の里」の竣工に際して、そのネーミング、及び「望みの門賛歌」歌詞の公募に多くの方々より御協力頂き、その御尽力に対し何もお報いする事もなく、今日に至っていることに対して、ここに改めてお詫びと御礼を申し上げたい。

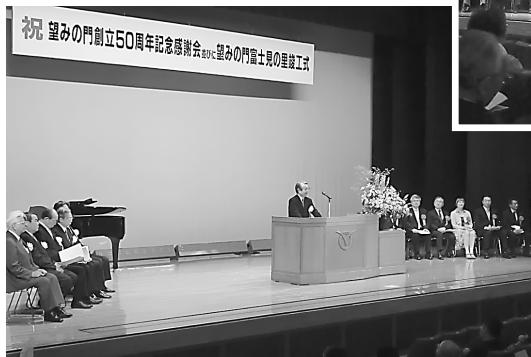
さて、十年前の四十周年記念式典は木更

津市のアカデミアホールで行われた。あれから十年余、二十一世紀初頭の日本社会は周知のように世界経済の混乱、リーマンショック



や、サブプライム問題の影響を始めとして、社会経済が不安定となり、長期にわたる不況のなかにある。同時に、少子超高齢化等による様々な福祉課題、即ち、単身世帯、老老介護、引きこもり、

虐待事例、自殺、家庭崩壊などが増加して、弱くなってきた家庭機能の支援、などの解決は「官」のみで解決できる時代ではなくなっている事は自明で



ある。ミッドナイトミッシェンのぞみ会はこの五十年、積極的に地域のニーズと、時代の流れを読み、福祉への期待と役割の増大に対応して来たといえよう。児童養護施設、乳児院、有料老人ホームの新設など、ハード面は誰にも分かりやすいが、見えないソフト面こそ大切である。年功序列制度から自己評価申告制度、幹部職員の年俸制の実施、人材養成のための職員研修の強化、会計事務処理の電算化、入所施設の運営単位の小規模化、デッドスペースの活用と無駄の排除、など全ての行動に「ISO 9001、2009」の手法の導入等が主なものである。わたしたちは常に福祉の課題を明らかにし、解決への道筋を付けていくことが求められている。それでは、これからの十年の課題は何であろうか。一言で言えば、在宅福祉対策の構築、つまり、地域と連携し住民に安心を運ぶ事にある。既に、地域包括サポートセンターは準備段階に入り、生活総合



相談事業として二十四時間、いつでも対応する君津福祉ネットも働いている。又、あまり目に付かない、が法人には望みの門福祉学校がある。既に卒業生は二百名以上であり今期も一五名定員既に満員で、皆さん二級ヘルパーさんとして主に市内で活躍しておられる。ちなみに講師は職員の手弁当であり従って受講料は低廉であり人気は高い。今後も福祉業界は市場原理の荒波にもまれるであろうが、目先の利害に一喜一憂せずに、ミッドナイトミッシェン創立の原点である、先達の信仰、「無から有を生み出す」全能の神への信頼を忘れず進んでいきたい。創



立五十周年記念感謝会の主題は「過去に感謝し未来を拓く」であった。時代の変化は急である。然し、昨日を反省、先輩の働きに感謝し、今日と言う日に全力投球すれば、明日はおのずと拓けると信じる。

(感謝会実行委員長)

望みの門バザー報告

バザー実行委員長 田尻 隆

今年のバザーは「過去に感謝し、未来を拓く」をテーマに六月二日(土)梅雨入り前の快晴のもと盛大に行われました。開会を飾るのは富津保育園の元気な子どもたちの太鼓の演奏です。生き生きと太鼓をたたき子どもたちの表情は真剣そのもので見ている私たちの心に響いてきます。子どもたちの太鼓が大好きで熱心に練習をしている姿が心に浮かん



できました。ありがとうございます。

いつも開店時に混雑する売り場は今回も多くの皆さまに來場頂き、会計にも長い列ができご迷惑をおかけいたしました。また駐車場がすぐに満車となり会場より離れた場所に停めて頂いたお客様にはご不便をおかけしましたことをお詫び申し上げます。

メイン会場では職員と利用者のご家族が腕を振るう屋台村に多くのお客様が集まりました。焼きそば、から揚げ、ラーメン、お好み焼き……どのメニューも終了時間前に完売となる盛況ぶりでした。餅つきコーナーでは餅つき機が故障するアクシデントがあり、急きょ子どもたちの手も借り予定の餅をつきあげました。コンサート会場での「君津ロータリー

クラブ 100年バンド」の演奏とフラガール達のダンスは感動のエンターテインメントショーでお客様も大喜びされています。この日のバザーを支えて頂いたボランティアの皆さまは百名を超



え、職員と一緒に接客にあたって頂きました。多くの皆さまに來場して頂き大変恵まれたバザーとなりましたことを心より感謝申し上げます。

準備段階では、宣伝のためバザーポスターを近隣に配って回りました。コンビニ、スーパー、病院、保育園、美容院、トレーニングジム、

飲食店、精肉店、道具店、釣具店、新聞販売店……地域の皆さまはどれも快くポスターの掲示に協力して下さいました。

このことは創立五十年を迎える望みの門の先達の働きが地域に根差ししていたからなのでしょう。これからも望みの門は、地域の皆さまと共に福祉の輪を広げていくことができれば幸いです。



望みの門バザー収支報告書

収 入		支 出	
当日売上げ	1,772,920円	材 料 費	644,405円
寄 付 金	218,089円	本部繰入金	1,300,000円
		次期繰越金	46,604円
収 入 計	1,991,009円	支 出 計	1,991,009円

望みの門コミュニティホール武道教室便り 「先輩誕生!」

合気拳法指導者 新藤 紀子

合気拳法では今年五月一九日に行った昇級審査会の結果、合格した子ども達への認定書授与式を六月九日に行いました。八級に二名、初級に一名が合格し、八級に昇級した里の子にちらりと自信が見えたように感じました。

確かに子どもたちにとっては遊びが面白く、練習が億劫になる時もあります。しかし、どういう理由であれ、この子は毎回遅刻してもしっかりと練習に顔を出しました。認定書の授与式にそのことについても話の中で触れると、少し恥ずかしそうに微笑みながら、しかし、その頑張る自分を認めてあげているようにも見えました。それがその子の自信のスタート地点だと思っています。

毎回の練習の始めと終わりに、子どもたちに「お説教」をします。面白いことにはじめにどんなにふざけている子どもも、次第に話に耳を傾け、最後にはそろって挨拶ができます。話は子どもたちの体のことや、世の中で起こった事件、私自身の体験といろいろですが、そのどれでもいいから子どもたちの人生の中で後々役に立つといいなあとと思います。武道教室も丸二年が経ち、子どもたちの

中にも根付いてきているように感じます。人によっては、練習後のおやつが目当てなのでは？と思っているかもしれません、あの暑い武道場に道着を着て行う一時間半の練習はそれだけではできません。十人十色のモチベーションですが、遊びたい気持ちを抑え、汗をかきながら苦しいことにもチャレンジするこの苦労があつてこそ、休憩時間のお茶や終了後のおやつが格別なものと感じられるのだと思います。

そうやって繰り返しながら我慢することや努力することが後の喜びにつながることを覚え、適宜周りの人からよい評価をもらうことではなかなかに認め、自信がついてくるのではないかと思います。

先日はいきなり燃えてふたつの技を一度に覚え、初級の技を全て習い終えた子どもがいました。振り向かない子供を振り向かせるのは一苦労しますが、振り向いた時は絶好のチャンス。二年目の今年は春だけでなく秋にも審査会



を行う予定です。現在十名前後で月二回、土曜日の午前九時半から練習しています。地域の子どもたちも習えますので、興味のある方は是非お声をおかけください。今後とも望みの門コミュニティホールの武道教室への応援、よろしく願います。

(望みの門学園副主幹)

東京望みの門 自立援助ホーム マナの家

マナの家のネコ達



指導員 早坂梓乃生

五月末にネコのあーちゃんが天国へ旅立ちました。あーちゃんは寮に住んでいたネコでした。一六年前に首輪をつけられたままやってきたそうです。捨てられてしまったネコのように、とても人懐っこく、温厚な性格でたくさんの人に愛されていました。入寮したばかりで緊張している寮生達の心をほぐしたり、退寮生にも「あーちゃんは今？」とあーちゃんの家をのぞく子がたくさんいました。

高齢になってからのあーちゃんはお庭や屋根の上で日向ぼっこをしたり、食堂で昼食の準備をしていると飛んできて自分もご飯とアピールをしたり、私達が話しかけるとお返事をする、少し人間の様な所もありました。怪我をしているのを見て病院に連れて行っ



くれたあーちゃんは大変な寮の仲間でした。

あーちゃんを天国に送ってひと月程たち、今度はホシというネコも天国に旅立ちました。ホシはお母さんネコで、三年前のある日の早朝に子猫三匹をくわえて物置きの下に連れて来て、寮の敷地内で子育てをしました。この家は安全だニヤ、とても感じたのでしょうか。その後ホシと三匹の子どもたちはボランティアの方たちに助けて頂き避妊手術を済ませ、最近のホシは昼間は寮のお庭で遊んで夜はお世話をしてくださる方の家に帰る、という生活を送っていました。ホシとあーちゃんは性格が全く違い、元気だった頃はケンカもしていました。今でも今頃は仲良く近くで眠っています。今でもつい習慣で帰ってきたかな？と勝手口を振り返ってしまうことがあり、その度に寂しいのはもちろんですが、二匹の猫たちは職員には話せない寮生達の心の奥にあるものを解きほぐし、小さな体で懸命に生きる姿か

た寮生もいました。毎晩のように抱っこをして遊んでいた寮生もいました。職員も何度も癒され、励まされました。言葉は話せなくても話していることも気持ちも皆伝わっていて、いつもそばにいて

らたくさんの方の事を伝えてくれたように思います。一緒に過ごす時が与えられたことに感謝し、伝わったことが各々の中で少しでも生き続けていくようにと祈っています。

婦人保護施設 望みの門学園

「前まではゴール今はスタート」



管理栄養士 鶴岡はるみ

「やったあ、報われた。神さま、ありがとう」管理栄養士国家試験の合格通知が届いたときには素直に嬉しかった。と同時に安堵感もあった。また私を見守り協力してくれた身内にも感謝した。

片手くらは試験に挑戦したのだろうか……受験したての頃は勉強もしないでどうにかなるかなと安易な考えでトライしていた。

出産や育児を経験し、少し考えも大人になったのか努力をする気になり、限られた時間の中で集中して、少しでも勉強らしいことをするようになった。

《継続は力なり》《信じる者は救われる》《初志貫徹》今なら全部その通り！と言える。

栄養士として就職してから、ワンランクアップの管理栄養士を目指して、ようやく取得できた。私は何事にも自分より前のもの（上位、上手のもの）を目指して、後方からそれ

をめがけ、追い越すことに励むことが好きだし、「抜けるよ、やれるよ」と誰かが私を応援してくれたら、調子に乗って「そうかも」とどこからともなく力が湧いてくるタイプ。学生時代の駅伝だってそうだった。

念願叶って管理栄養士になった。さてこれからどうしよう……せっかく勉強した知識は嬉しさのあまりどこかへ飛んでいった気がする。合格しただけでそんなに経験があるわけでもない。管理栄養士の上の資格って思いつかない。でもせっかく管理栄養士となったからには知識のレベルを落とすたくはない。今は嬉しさとは裏腹に不安も出てきた。目標が達成されて、次の目標が思いつかない。何のために資格取得したんだろ

う。世にいうスキルアップ。人によってゴールという意味合いで使う人とスタートととらえる人がいる。私にとってのスキルアップの意味はどれにあたるのだろう。

今は、目の前



の仕事に精一杯励むこと。出来るだけ持っている力を出し惜しみせずに使うこと。楽しく美味しい毎日の食事を提供すること。思い浮かぶのはこれくらい。

管理栄養士という肩書だけと言われないように、スタートラインから今、一歩踏み出した。

養護老人ホーム 望みの門楽生園

楽しく生活するために

支援員 町田 佳市

暑い季節になってまいりました。楽生園の皆様は、元気に過ごされております。

利用者の中には、高齢により身体機能が低下してきている方も多くなっています。

その方達が少しでも自分の力で日常生活が継続出来るようにしたいという事から、週二回リハビリ、レクリエーションを行うことにしました。これをリハレクと呼んでいます。リハレクでは、頭と体を使って機能の維持に努めています。

生活の中で、運動することはとても大切な事です。ただ、単に体を動かそうとしてもなかなか動くものでもありません。楽しみながら体を動かすことで継続して行える事を目標にしています。

『楽しく』といった事から、歌を取り入れ

利用者の皆さんが知っている歌をうたい嚙下運動になり、認知症の予防にもつながります。声を出すことで、誤嚥防止につながり食生活が楽しめるようになって来ています。

次に体の機能を動かす事を考え、車椅子での生活をしている方を中心に手指・腕・足の曲げ伸ばし・首の上下運動を入れ、関節、筋力の低下防止につながる運動を行っておりま

す。それを歌に合わせながら動かすことで楽し

みながら自然に出来るように工夫しています。また、毎週金曜日には看護師の協力を得ながら歩行訓練を行っています。これは、下肢筋力の低下に伴い車椅子を使用している方の残存機能を活用し、立位や歩行の練習をしています。車椅子は移動手段の一つなので、乗ったきりにならない

ように少しでも歩く時間を作りそれが生き甲斐になって楽しく生活が送れるように支援していきたいと思っています。



特別養護老人ホーム 望みの門紫苑荘

いのち

施設長 佐野 毅

昨年十月に、望みの門紫苑荘の施設長として異動の命を受けました。

同日付けで、前任の簾 昭博施設長が、新特養ホーム開設準備室長として転出されたのを受けての人事です。

前任施設は（赤ちゃんの施設）「望みの門方舟乳児園」でした。施設といっても、わずか九人定員の乳児院で、千葉県でいや全国で一番小さな乳児院でした。理由は、「一人一人の赤ちゃんを、大切に愛情をもって育てたい。」という願いから県の担当課長を説得して、ようやく実現した乳児院でした。

ときには、生後五日目の赤ちゃん、まだ「へその緒」が付いたままの赤ちゃんを産院から直接お預かりしたケースもあります。

昨年度は、一年の間に「赤ちゃんの施設」から「百歳のおばあちゃんがいらっしゃる特養ホーム」へと急な異動でしたので、私自身が環境の変化に大変戸惑ってしまいました。望みの門紫苑荘に赴任して間もなく、ある利用者さんがお亡くなりになりました。死因は「老衰」でした。私は自分の身内以外の方の御臨終の場に立ち会うケースはあまりありま

せんでしたので、大変に気が動転いたしました。

昨年一年間

は、私にとって職場環境の劇的な変化の年となりましたが、同時に人の「いのち」というものについて色々と

考えさせられた一年間でした。

折しも一昨年の「東日本大震災」を契機に、「絆」であるとか「ふれあい」であるとか「やさしさ」、「支え合い」といった言葉が、日本中を駆け巡りました。

人が、この世に「生」を受けて、その人なりの人生を全うしてやがて亡くなっていく、という「いのちの営み」について、こうであるとか、どうであるとかいった「言葉で表現できるレベル」を超越して、崇高な次元のレベルで「いのち」とは何であるか、について様々な想いが頭の中を去来しました。

今日も利用者さんや職員の皆さんとの交わりの中で、「自分は、この人たちの良き隣人たらんとしているか」と自問自答の毎日です。

